

宮城 社会 国連防災会議

## <被災者と防災会議> (1) 生きた証し忘れぬため

東日本大震災の発生から4年がたった被災地で14日、国連防災世界会議が始まった。世界の目が被災地に注がれる5日間、多くの被災者が発表者やガイドなどとして会議に関わる。震災で失ったもの、気付いたこと。被災者の歩みをたどり、会議への思いに触れた。(5回続き)

### ◎大川小卒業生・只野哲也君(15)母校の保存訴え

あの日津波にのまれ一命を取り留めた少年は、亡くなった家族や友だちへの思いを胸に被災した母校の保存を訴えた。



「自然いっぱい子どもの笑顔が絶えない大川に帰れる日が来るまで伝え続けたい」と語る只野君

拡大写真

### <後世に伝えたい>

「大川小の校舎はどんな写真よりも強い印象を与える。広島原爆ドームが戦争の愚かさを伝えたように、大川小の校舎も地震や津波の恐ろしさ、命の大切さを後世の人に伝えるきっかけになってほしい」

東日本大震災で児童と教職員計84人が犠牲になった石巻市大川小の卒業生で、蛇田中3年の只野哲也君(15)は14日、国連防災世界会議パブリック・フォーラムの宮城県子ども支援会議主催のシンポジウムで意見発表した。約200人を前に大川小の先輩たちと被災校舎の保存を呼び掛けた。

「大好きな母校だし、壊してしまったらいずれ震災のことは忘れ去られ、同じ場所に家が建つかも知れない。そこに津波が来てまた人が死ぬのは、絶対に嫌だ」という思いからだ。

震災当時、5年生だった。校庭にいて同級生らと共に津波に襲われた。奇跡的に助かったが、祖父弘さん=当時(67)=と母しろえさん=同(41)=、3年生だった妹未捺さん=同(9)が亡くなった。

「あの日何があったか、生き残った自分が伝えないといけない」。マスコミの取材などで証言を続けたが、校舎の保存を主張するようになったのは約1年半前。子どもを亡くした遺族の中から「見るのがつらい」と、解体を望む声が出ていることを知った。

### <勇気を振り絞る>

2013年11月、東京で開かれたシンポジウムで初めて大勢の人の前に出て話をした。「校舎を残してほしい。子どもたちが生きていた証しだし、多くの人に見てもらい、自分たちと同じ思いをする人をなくしたい」。勇気を振り絞った。

同じ思いを抱く先輩5人が一緒に活動するようになった。毎月話し合い、昨年仙台と東京であったシンポジウムで意見発表した。

今月8日、地元の住民組織「大川地区復興協議会」の全体会で初めて意見を述べた。緊張したが、解体を求める人たちの考えも直接聞けた。よく理解できたし、同時に「自分たちの意見も多少は分かってもらえた」と感じた。

14日の世界会議のシンポジウムでは「絶対に多数決で決めてはいけない。壊したい人と残したい人がもっと意見交換し全員が納得できる方向にするためにも、これからも地域の人たちと話し合っていきたい」と語った。その顔には、たくまさが備わっていた。

(石巻総局・丹野綾子)

関連ページ: [宮城](#) [社会](#) [国連防災会議](#)

2015年03月15日 日曜日